



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 11 号
令和2年3月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

成長

校長 富田 敦

「体力がつくとうまくいくことがたくさんある。」6組（特別支援学級）の活動の様子を見てみると実感します。6組は、4月から「朝マラソン」を始めました。朝の10分間に陸上トラックを走ります。始めた当初は7周しか走れなかった1年生も、今では10周走れるほどに体力が付きました。まさに継続は力なり、です。

体力がつくと、いいことがたくさんあります。一番いいのは「自信がつく」ということです。体力がついたことで6組の生徒はスポーツ大会で好成績を収めたばかりでなく、一人ひとりの集中力が高まったり、根気強くなったりして学習面も向上しました。これにより自己肯定感も高まります。

登校してくる生徒を正門で出迎えていると、気が付くことがあります。6組の生徒は、大股でサッサッと歩いてきます。背筋も伸びて姿勢もよいです。まるでウォーキングをしているかのような軽やかな足取りです。

この6組の3年生2名を加えた土呂中学校3年生は3月13日に卒業式を迎えます。第24期卒業生の門出を保護者、地域の皆さまとともに祝いたいと思います。

「感動！学年が1つのチームになれた館岩自然の教室」

2泊3日で行われる自然の教室はスキー実習が活動の中心です。事前のアンケート結果で技能レベルが近いと想定される8～10人のグループに分かれ、インストラクターが指導します。初心者であっても生徒はあっという間に上達していきます。初日はゲレンデの下の方で基礎を教わっているグループも3日目になると、ゲレンデの下からは見えないほど上の方で滑っています。それほど成長の度合いが目に見えるのがスキー実習のいいところです。「子どもは素晴らしい！」引率のたびにそう思いますが、今回も言わずもがな、でした。

しかし、ただスキーだけが上達すればいいというわけではありません。宿泊を伴う校外学習は、3日間の生活そのものを教材とする学習なのです。実行委員の生徒たちを中心に、集団生活のルールを作り、自分たちで自分たちのことをコントロールする力を身につけます。

酒井 心寧 実行委員長、鈴木 涼陽 副実行委員長、塚田 ひより 書記の3人は3日間の館岩自然の教室を振り返って、次のように話してくれました。「1日目は反省点が多く、それを改善していこうと室長会議で話し合いました。これにより、日を重ねるごとにだんだん自ら行動できる人が増えてきました。館岩に行く前にしおりの読み合わせをしたはずなのに、初日は『次は何をやるの？』と室長や実行委員に聞く人ばかりでした。このときはクラスのまとまりがありませんでしたが、『自分がやらなくては』と一人ひとりが思うことで学年全体に協力の輪が出来上がってきました。」

生徒全員の心が1つになったことについて、自然の教室主担当の齋藤 大輔 教諭は「いつも1歩が踏み出せないでいる赤学年の生徒が学年レクで殻を破った瞬間に立ち会えたことに感動しました。実行委員の思い、先生の思い、生徒の思いが積み重なって全員合唱『キセキ』が響き渡ったことを一生忘れません。」と語ります。

実行委員3役の3名は約1か月後に迫った最上級生への進級に向けて「もう少しで最高学年です。私たちは今の3年生から受け継いだことを後輩に伝えていきます。学校行事では、自分たちで考えて行動し、成功するように意見を出していきたい。特に体育祭では、練習から思いっきりやって、全員で楽しく元気に取り組みたい。修学旅行で今回の経験を生かし、来年の卒業式では返事の声がかかりとできるように、歌も土呂中生らしく聴く人を感動させるような歌にしたい。そのためには今の生活をレベルアップし、3年生の先輩たちを気持ちよく見送れるように、4月には新入生を元気いっぱい迎えらるるよう、学校全体がエネルギーを出していく、その中心が私たちでありたいと思っています。この3日間で自分たちが思っていた『自律』は達成することができました。これを私たちの将来につないでいきます。」と決意を語ってくれました。

新型コロナウイルスへの対応については、教育委員会と連携を図りながら適切に対応して参ります。